

白金蔵

十二月



平成25年12月発行 第34号

白金葭定例句会案内

月例句会報(13/12/20 6名欠3 湯たんぽ、葱)

一月十七日(金) 12:00~15:00(アビスタ第三学習室)兼題:新年一

般 二月二十一日(金) 12:00~15:00(アビスタ第三学習室) 17:00~19:00 新年会(備前本店)

三月二十一日(金) 12:00~15:00(アビスタ第五学習室) 兼題:春の日、蝶

飯田孝三

黄落やカイゼル髪は明治の髪(鷗外記念館)
湯たんぽや垂乳根滲む夢ノ中

色々がひ同じ波形湯たんぽ二つ
葱野蒜送りくれしに計報くる

湯たんぽやこの足踏みし山や川

恵方道人より先に犬がゆく

諸共に寿ぐ老の福茶かな

芝居見に妻出してやる女正月

歌留多とる皆美しく負けまじく

元日の日があたりをり土不踏

元日の開くと灯る冷蔵庫

おのづから併は人なりこぞことし

去年今年以心伝心の妻とゐる

愛と云ふ一字に盡きて去年今年

絆をぬけ出て只の年男

年玉は学费の一部苦学子へ

生きてゐる顔がうつすら齊粥

億万の民に母あり齊粥

不精にて年賀を略す他意あらず

電車待つといつもの位置に立つ

女坂箱根駅伝男坂

新年一般の参考句(二月十七日分)

茂田慶花
磯田みどり
志摩芳次郎
高濱虚子
石田波郷
池田澄子
加藤郁平
野原晃山
蛭海停雲子
白井幸子
寿々木昌次郎
吉田成子
高濱虚子
岡本眸
久遠順

増田陽一

日米開戦朝の湯たんぽぬるかりし

鼻が湯たんぽ欲りて啼きゐたる

青葱と中の空氣と直立す

少年と葱をユリ科に数へけり

視野に崩る彗星と夜の霜柱

増田悦子

湯たんぽのさめてさかんな朝雀

湯たんぽのまだ温かく寝てをりぬ
二人には大きすぎたる葱の束

光成高志

松村幸三

十一月八日。パンあり。珈琲も。

忘れじのぶりきの波の湯婆かな

義士の日や絵本に橋の日本晴

羽子板のお軽買はれて行きにけり

喜びも悲しみも知る葱刻む

浅野正美

したいこと多く残して寒椿

西日さす座敷奥まで冬うらら

湯たんぽの丁度良き場所ぬくぬくと

黒々と土盛り上げて葱の列

風邪に効くきざみ葱巻き幼き日

吉羽多美子

青木啓泰

豊かなる根つこの付いた葱届く

刻み葱たっぷり入れて蕎麦の湯気
ほとんじが青みの葱でモツの碗

ベジゅベジゅトマトがゆるトマトぼー

柚子風呂で丹後の国を考える

吠ゆること忘れし犬と冬籠
葱畑客ひとり乗る渡し舟
街灯のひとつ消えゐる師走かな
湯たんぽや幾度家を移りしか
土産物勝手口より花八ツ手
寒牡丹作務衣の僧の高篭

湯たんぽにそそぐ湯の口見つめをり
朽葉積む山に八角三重塔
暖炉の火に釣られ入りけりガラスカフエ
胡麻まぶす如く鳴の枯木立
槍立てる因達羅大将葱植ゑる(上野に十

病院の中ゆく梯子十二月
葱刻む」と五十年病みもせず

病院の中ゆく梯子十一用
採血のあと湯たんぽにたゞ

山眠る生れつある島ひとつ

吠ゆること忘れし犬と冬籠

選句結果（数字は入選数 左添書きは添削句）

羽子板のお軽賈はれて行きにけり
日米開戦朝の湯たんぽぬるからじ
吠ゆること忘れし犬と冬籠
葱刻むこと五十年病みもせず
少年と葱をユリ科に数へけり
十二月八日パンあり珈琲も
忘れじのぶりきの波の湯婆かな
湯たんぽにそぞぐ湯の口見つめをり
湯たんぽや幾度家を移りしか
義士の日や絵本に橋の日本晴
採血のあと湯たんぽにただ眠る
青葱と中の空気と直立す
湯たんぽやこの足踏みし山や河
湯たんぽやこの足踏みし山や川
黒々と土盛り上げて葱の列
視野に崩る彗星と夜の霜柱
胡麻まぶす如く鳥の枯木立
湯たんぽのまだ温かく寝てをりぬ
喜びも悲しみも知る葱刻む
豊かなる根つこの付きし葱届く
豊かなる根つこの付いた葱届く

多 美 子 高 志 幸 一 陽 一 陽 一 陽 一 陽 一
啓 泰 幸 一 悅 一 正 美 孝 三 幸 一 み ち 幸 一 み ち
多 美 子 高 志 幸 一 陽 一 陽 一 陽 一 陽 一 陽 一
啓 泰 幸 一 悅 一 正 美 孝 三 幸 一 み ち 幸 一 み ち

朽葉積む山に八角三重塔
湯たんぽのさめてさかんな朝雀
山眠る生れつつある島ひとつ
二人には大きすぎたる葱の束
鼻が湯たんぽ欲りて啼きゐたる
西日さす座敷奥まで冬うらら
病院の中ゆく梯子十二月
したいこと多く残して寒椿
葱畑客ひとり乗る渡し舟
葱畑や客ひとり乗る渡し舟
黄落やカイゼル髭は明治の髭（鷗外記念館）
ぐじゅぐじゅと目玉がゆるむ日向ぼこ
槍立てる因達羅大将葱植ゑる（上野に十二神将像を見て）
街灯のひとつ消える師走かな
柚子風呂で丹後の国を考える
湯たんぽや垂乳根滲む夢ン中
色ちがひ同じ波形湯たんぽ二つ
ほとんどが青みの葱でモツの碗
湯たんぽの丁度良き場所ぬくぬくと
暖炉の火に釣られ入りけりガラスカフエ
土産物勝手口より花八ツ手
刻み葱たつぶり入れて蕎麦の湯気
寒牡丹作務衣の僧の高等

高 志 悅 子 み ち 正 美 み ち 正 美 陽 一 陽 一 陽 一 陽 一
啓 泰 幸 一 孝 三 幸 一 み ち 幸 一 み ち 幸 一 み ち
多 美 子 高 志 孝 三 啓 泰 啓 泰 啓 泰 啓 泰 啓 泰
多 美 子 啓 泰 多 美 子 啓 泰 啓 泰 啓 泰 啓 泰 啓 泰

葱野蒜送りくれしに計報くる
風邪に効くきざみ葱巻き幼き日

孝三
正美

一句鑑賞

羽子板のお軽買はれて行きにけり

光成高志

幸一

お軽は萱野勘平の妻の名である。淨瑠璃の「仮名手本忠臣蔵」(一七四八)の中で夫の用金調達のために身を祇園の一心楼に売ることになっている。現代では、羽子板のお軽となつてやつぱり買われて行つてしまふのだなあ、あはれお軽は、という感慨が詠われている。後ろに元禄快挙録の世界が広がつている。ほんとは、萱野三平重実には妻はなく、忠と孝の間で窮して自ら命を絶つた武士であつた。虚実の中にもののあはれと諧謔が漂つている。軽みに通ずる佳句だと思います。(重実は俳号を涓泉と称した。けだし大高子葉らと同じく沾徳が門である。幸一さん!お軽を通じて重実を悼んでいるとは何と奥ゆかしい。)

青葱と中の空氣と直立す

陽一

葱の匂の頃、盛んな青葉ははちきれんばかりに膨らみ直立している。下総にはこのような青々とした葱畑がどこでもよく見られる。膨らんだ青葱の中になるほど空気が充满しているのであり、葉に囲まれて直立しているのだ。「突き抜けて天上の紺曼珠沙華」(誓子)の句と同様に季語の本意を言い当てた佳句と思います。

湯たんぼや幾度家を移りしか

多美子

「湯たんぼや」と切字ではねあげ、そういうえば幾度家を移つて今ここに、またあの湯たんぼと共に生活していることだなあ、ああハレ。あの時はあの家で、又あそこでは、子を産んで、家族が増えてとかなんとか「思い出してごらん」と湯たんぼに語りかけている多美子さん。

一句鑑賞

お軽は萱野勘平の妻の名である。淨瑠璃の「仮名手本忠臣蔵」(一七四八)の中で夫の用金調達のために身を祇

一句鑑賞

飯田孝三

葱畠客ひとり乗る渡し舟

多美子

矢切の渡しがすぐ目に浮んだ。が、他のどこでもいい。まさに、今では減つてしまつた渡し場の風景である。「客ひとり」の点描がポイント。よつて、景が目に飛び込んでくるのだ。臍である。一目瞭然。はて、その先に何を観、思いを何に馳せるのだろう。読み手も、又、乗る「客」に、それぞれ自分の投影を見るかもしれない。写生だけの句ではないのである。

十二月八日パンあり珈琲も

幸一

長引く景気の低迷にも拘わらず、日本ほど食物の豊富な国はないだろう。居ながらに、世界各地のとりどりの食物を口にすることができる。パン、珈琲などは日常茶飯の最たるものだ。ふと気づけば、今日は十二月八日、六十九年前、日米の戦争(世に大東亜戦争と称し、また太平洋戦争とも言われる)が始まった日である。以後、戦中戦

後、パン・珈琲どころか、米、麦、野菜始め食料一切、各種物資の極端な窮乏を久しくした。パンや珈琲が、日頃、庶民の口に入るようになつたのは、敗戦後十年も経てからだらうか。さまざまな思いが脳裏に去来するのである。止め「も」の軽いタツチがいい。仮に珈琲「あり」だと俳句らしくなく、重くれ、嫌味が覗くだらう。

青葱と中の空気と直立す

葱はユリ科の多年草で、日頃身近だが、『日本書紀』にも出てくるほど古い野菜、総丈三四〇センチほどに真直ぐ伸びる。青葱は白い茎の上、緑葉の部分、筒形で中空、その先端に晩春花を咲かせる。葱坊主である。関東では白葱が好まれ、畝高に土を堆み育てる。関西は葉葱嗜好でそうはしない。ご託宣が長過ぎたが、掲句に目を瞠つた。青葱が直立なら、中の空気もその筈、ほんとだ。驚いたのは道理にじやない。それをすつとばした詩的真実を呆氣羅漢とつきつけられ、啞然としたのである。感覚銳く知的、且つ又、俳諧が滲む。言いつ放しの知らん顔ぶりが憎い。单刀直入、結「直立す」の外連なさがいい。一句のリズムの弾みがそれを引き立てる。葱は眼前の列で勿論いいが、時空を遡り、記紀万葉の畠に空気を突つ立てていたと思えば、なお面白い。「少年と葱をユリ科に数へけり」も、鋭い生理感覚をもつて、独自ユニークである。白葱だらう。結、数へ「けり」が水際立ち、情韻交響し

陽一

湯たんぽのまだ温かく寝てをりぬ
視たまま、思うまを述べる。普段のことばに心がやどる。俳句はその器。両句は今さら、それに気づかせてくれる。前句、俳句で「二人」は夫婦。誰もが身に覚えがあるだらう。寝てをり「ぬ」の收めが秀逸。湯たんぽの余温に朝方またまどろむ、そして、ふつと覚めて、それに気づく。そのあたりの阿吽の微妙が句の勘所である。

湯たんぽのまだ温かく寝てをりぬ

悦子

て妙。手許の大歳時記でも、両句ともに、古句、現代句を通じ類想、等類を見ない。

二人には大きすぎたる葱の束

柚子風呂で丹後の国を考える

啓泰

柚子と丹後の関わりが分からず、句会では、惹かれながらパスした。終つて何人もの方も同じだつたと伺つた。帰つて早速妻に同地生まれの友だちに聞いて貰つたところ、丹後は寒いので、柑橘類は育たない、たわわの柚子を見た覚えはない、幼い頃の柚子湯の記憶もない。楽しかつたのは、お友だちを呼んだ雛祭だつたとのこと。さて、困つた。温かい柚子の香に浸りながら、遠く故郷丹後の寒さを思うのだろうか。啓泰さんは、地元のご出身ではないのかな。「思ふ」ならぬ「考える」が気にかかる。丹後の国との関わりは如何にと、考えさせるのである。

吠ゆること忘れし犬と冬籠

みち

ほのぼの、ふわふわの犬の抱き心地は、「冬籠」りの気

分そのもの。ふーむ、むべむべ。ところで、この頃は、この頃は、番犬は異端、留守番させりや、夕暮れは遠吠えする始末。凡そ世は、お座敷犬のペットを抱き競うばかり。とはいえた炎天下、ダックスフントにちやんちやんこ着せて、石の舗道を引き歩くなんてのは、狂気の沙汰。動物愛護協会に急報したくなる。ついつい余談がすぎました。犬を抱く素肌感覚で、冬籠りの雰囲気をとらえて妙。当世諷刺の氣も籠るだろうか。仮名を送らぬ「冬籠」が、冬ごもりの氣息を丸ごと伝えてくれるのである。

(平・25・12・22)

一句鑑賞

湯たんぽやこの足踏みし山や川

孝三

ある年齢に達した人の、湯たんぽに足元を預けながらの來し方の回想句。山や川は實際の山や川であるとともに又人生の山や川。湯たんぽというまことに軽小な日用家庭の具が俳句の世界で置かれようによつては人の一生の喻に転化する大きな存在となる。さりげなく添えられた「この足」の「この」に無量の感慨が宿る。読み手の一人一人が所有しているにちがいない「この足」であり、「山や川」である。

高志

湯たんぽにそぞぐ湯の口見つめをり
この一句の中で、作者は病臥の人となつてゐる。湯た

湯たんぽのさめてさかんな朝雀

悦子

湯たんぽには境涯を託した佳句が多い。しかしこの句は境涯詠に伴う負のかげりをとどめない。いつそ湯たんぽはさめ果てることでそれを使用した人の、今日これらの一日を励ますかのようだ。にぎやかな雀の祝福の歌が、これに和す。一句の中にS音が五つもはさまれていふことが、一層弾んだ倍音のリズムを奏でる。こういう晴れ晴れとした湯たんぽの句もあるのだつた。

病院の中ゆく梯子十二月

みち

こういうこともあるのだろう。何で担架ならぬ梯子が入るのか、何處かへかつがれて何をするのか、読者は分からぬ。その時病院に居た大方の人の眼にも、当事者以外は分かるまい。好奇や不審や診療待ちの屈託と無聊の眼差しなどに見守られながら、梯子は通り過ぎて行

んぽに湯をそそぐ人は、奥さんか身内の誰かであろう。自分にとつても大事な人が今身を傾けて湯をそそいでくれている。病臥の人はその手元を云い尽くせぬ感謝の思いで見つめている。苦労をかけている、済まない、愈えた暁には十分にお返しするからネ、と言葉を呑みこんでじつと見つめている。そういう光景が見えてくる。その感動が読み手に伝わつてくる以上、一句がかつての日の回想でもよく、全くフィクショナルな創作であつても間うどころではない。

くのである。読み手もこの時正に病院に居る。十二月といふ時ならぬ季語が、何とこの不調和な光景に見合つてゐることだろう。この季節意外だつたらこの一句のはらむ事件性は他愛なく消え、トリビアルな意外感だけで終る。

少年と葱をユリ科に数へけり

陽一

広辞苑でユリ科の項目を開けると「單子葉植物の一科。種子植物中で最も大きな科の一。世界の熱帯から寒帶、高山に至るまで分布し約三百属五千種。」云々とある。その「果実は蒴果または液果。ユリ・ネギ・サルトリイバラ・チューリップなど。」とある中に、作者は少年を組みこもうとする意表外の挙に出た。何で少年と葱なのであろう? つよい香りを抱えこんだシンプルな清潔さ、ういういしさ、直情、含羞。連想をひろげてゆけば限りなく、どうやら危険な官能の匂いさえ伴つてくる。魔法をかけたら葱と少年とは互いに入れ替り得るかもしない。ぼくは昔、川端康成の「少年」という同性愛小説を人目はばかるようにして溺れて読んだ経験を思い出した。あるいはもつと遡つて、江戸川乱歩の明智小五郎探偵が鐘愛してやまなかつた紅顔豊頬の美少年小林芳雄君を。ひとつとしてぼくはこの一句にとんでもない詠み違いを犯しているのかもしれないが、人の心の秘められた暗渠を流れるせせらぎの忍び音を、ふと聞きとめた気分になつた

ことを記しておきたい。

したいこと多く残して寒椿

正美

ぼくはこれを作者自身の(多分年の瀬の)心懐と受け取つた。それなら残してより残りての方が、表現として正確と考えた。あとで伺えば亡くなられた御主人を思つての句のこと。なるほどそれなら句が別段と深みを加える。多分庭先なのであらう沢山の深沈たる寒椿の姿容が、切なく瞼に迫る。たしかに「残して」とあるべきだが、と恥じた。改めて訂正したい。但し言い訳になるが、卒読のかぎりでは自詠という解釈も成り立とう。ここは「悼」あるいは「亡夫」という前書が欲しい。読み手との疎通が表現者の遂の志であるなら、一見冷たい前書という手だでも場合によつては欠かせないのであるまい。

一句鑑賞 vi (33号分)

武者昭七

柄ごと落つ風のいたづら朴落葉

みち

台風のあとなど枝ごとへし折られて散乱している葉っぱの無残な姿を見ることがよくある。柄ごと地面に散り乱れた落ち葉を「風のいたづら」とおどけて見せたところにユーモアとやさしさがにじんでいる。一句を一気に詠みくださずに三句構えに組みあげたのもすつきりして明るく軽快なリズムを生んだようだと思う。

雪の富士車窓に故郷近づけり

多美子

旅の車窓に次々に移つていく風景はそれを見る僕らの胸にさまざま思いをかきたてる。詠者は雪の富士を車窓に見つけて「ああ、ふるさとが近づいた」と実感したのである。そのこみあげてくる安堵感と懐かしさとがゆつたりとした句のリズムに生きている。反対に「ひとり車窓に目醒むれば／まだ上州の山は見えずや」（氷島）と激しい口調で叫んだのは荻原朔太郎であった。

朴落葉いちまい渡る谷の空

幸一

散り落ちていた朴の葉が折からの谷風に追い立てられ舞い上がり大海に漕ぎだした小舟のように身をもみながら渡つていくのである。深い谷と谷の上の大きく開けた空という雄大な景色と、そこをひらひらと渡つていく朴の葉の小ささと二者三様の対照が見事にとらえられる。硬い漢字表記に挟まれた「いちまい」という平仮名表記が風に揺られて谷を渡る落葉の揺れ動くさまを想像させる。

頃合を見て発つ鴉の黒さかな

啓泰

拙宅の隣家の庭にヤマモモの大木があり、時折鴉がやつて来てはしばし枝を渡り歩いたあと、首を前に突出し姿勢を整え一呼吸おいてさつと飛び出すのを時々目ににする。掲句を拝見してなるほど「頃合を見て」という飛び出しがあるものだと感じ入った。ひよつとして何事

も「頃合い」というものはあるのかもしれません。それでも鴉という鳥はどうしてあんなに黒いのでしょうか。その黒さとつややかさ。思わずみとれてしまうことがあります。結句にもそれが感じとれます。

鑑賞と邂逅のいきそつ（33号）

飯田孝三

逢ふも遇ひたり命ハツ林檎哉

高志

思いがけぬ出会いの驚きと悦びである。その主は、高志さん・みちさんご夫妻とわれら夫婦、さる11月4日、長野電鉄別所線車内でのこと。ご夫妻は、佐久平、塩田平を周遊、別所温泉泊の帰途、こちらもはからずも同温泉泊の帰り、偶々息子家族四人も一緒に、いつの間にか結婚五十年、初めて皆で出かけた帰りである。塩田駅発車寸前の電車に、ご夫妻が乗り込まれたのである。三車輪繋ぎの真中中央部。まさかと思ったが、間違いない。思わず声をかけ合い奇遇にびっくり。ご夫妻は前山寺、無言館を巡られ、シャトルバスが駅に早く着いたため、帰りの新幹線は一便繰り上げの帰路。小生らは北向観音参詣、現地昼飯を取り止めて、始発駅の駆け込み乗車である。かくしてばつたり。されば何たる奇遇、いや奇縁。
「命」は、土芳との二十年ぶりの再会の感激を詠む、芭蕉「命二ツの中に生きたる桜哉」をふまえ、西行「命なりけりさやの中山」と遠く響き合う。互いに命を愛しみ、

たんぽぽや三菱さんは何百社

擣いて擣いてやうやく混じる蓬餅

高志

リ

変更の発案をお願いしたい。
擣いて擣いてやうやく混じる蓬餅

高志

ハガキ句三十五報管見

飯田孝三

敏子

巣作りの鴉が剥がす棕櫚の皮

鴉シリーズ第三弾。作者は村の鴉と昵懇である。時、あたかも産卵の季節。雌鳥たちは巣作りくりに余念がない。（雄も手伝うのかな）都会の猛者たちは、なんと、針金製のハンガーで巣を組み立てる。（何？ 人間の住処だつて、鉄筋、鉄骨入り）そりや、ひとも鳥も天然のやさしさに包まれたいよ。母さんの子守唄を聞きながら。棕櫚の皮は鳥の営巣になにより。ご先祖の昔から、そうしてきたんだもん。まあいい目をした、いい子が育つに違いない。棕櫚皮の剥ぎとりに勤しむ親鳥の挙動が、一々、目に見えるようだ。巧まず、抜けて、ほのぼのと俳諧味がこぼれる。作者ならではの吟。

たんぽぽや三菱さんは何百社

高志

参った。「たんぽぽや」が決まる。「三菱さん」との照応が憎い。殊に、～「さん」の抜けっぷりが見事。又、「何百社」がたんぽぽの咲く様に通り、えも言えぬ。合点。三菱を花に喻えるなら、なるほど、たんぽぽだ。明るく、面白く、知的である。ふところが深い。ダイヤの社章の変更を進言したくなる。次は、三井、住友の社章

はた、と膝打つ思いだ。蓬餅を擣いたり、見たりした者なら、皆、そうだろう。餅擣きは、その前に杵で粗搗ねしてから擣く（擣き慣れない者は、この段階でへばる）のだが、蒸し上げた飯粒が餅になるまで擣き込むのは、なかなか大変。ましてや蓬餅である。蓬葉の纖維が飯に馴染み、滑々、艶やかでふくらかな餅になるまでに擣き上げるのは、実に、容易ではない。ふつうなら、上五中七がくどいが、ここでは違う。ずばり、句のいのちである。就中、「やうやく」が真髓。（ただし、だてに真似ると悲惨）

蓬餅には、父祖伝来の民族の魂が籠り、文化の息吹きを伝えるのだ。勿論、この頃もっぱらの、人工の染め餅では、こうはゆかぬ。

三月の朝を掃きをり竹箒

三穂

「三月の朝」と「竹箒」の取合せの微妙が勘所。「をり」が脣。引き絞りが利き、調べのよろしさと相刺、快。Sa N Ga Tu No a Sa o Ha Ki o Ri Ta Ke Bo Ho Ki。地面を掃く箒の音が聞こる。
(駄句近作) 二月、従姉逝く。享年九十九歳(二句)。逝きにける花辛夷未だ翔けざるを

うから寄り白寿の花を天上で
入園の青アムブレラ足が生え
園児らに四日つづきの花の雨
すっぽりと桜つむじに園児達

(平20・5・31)

お便り広場（到着順、敬称略）

前略 今年も米作りをしました。一反ほどで残り一反余
は小作に出して作つてもろうています。300m²ほど畑に
して野菜を作っています。作物の性質で一度に大きくな
り食べきれず田圃の肥料になる分も多くあります。一反
余でも私と娘では食べれません。少しですが送ります。
食べて下さい。昔ながらの稻架乾燥でゆつくりぼちぼち
と行つて終らせました。来年はそろそろ引退しようかと
考えています。何も気を使わないで下さい。また正月が
来ます。良い年を迎えるよう祈っています。あまり
良いニュースはありません 私は元気です。

葉も落ちて柿の実ばかりぶらさがり（駄目か）草々

(平25・11・26 横田健三)

拝復 「白金葭」第33号を拝受拝読。ご〇〇〇も有難く拝
読。お陰様にて十二月一日（日）に退院です。「柿食うて
正倉院の戸籍かな」（啓泰）この句に注目。大宝二年（西
暦七〇一）今から一二二一年も昔の戸籍が残っている由。

光成様 寒くなりました。ご自愛下さい。「柿食つて正

この戸籍の人々の子孫は継続していると四二一三世代の
はず。子孫の人たちはどこでどうなつているのでしょうか。
中国の陶淵明さんの子孫は今も「陶」姓で同一地区
に沢山居住している由の文献を読んだことを連想。この
「白金葭」の作品も一〇〇〇年も一三〇〇年も後世まで
残ることを想像すると空想は拡大し、樂しくなります。
「ビル多き佃島にも路の臺」（高志）高層ビルと路の臺の
取り合戦、人工と自然の対比と路や雑草が勝ちビルは
老朽化して廃墟となる日がこないことを祈りたくなりま
す。感謝して一筆御礼まで。奥様共々のご健康を祈り申
しあげます。 (11/28 (木) 敬白 河村博昌)

今年は縁あつて貴誌に拙文を掲載する機会に恵まれ大
変嬉しい年になりました。有難く存じております。編集
氏のご健康と貴誌の一層の発展をお祈りいたします。
(H25.12.1 武者昭七)

白金葭 11月号頂きました。益々の充実振りに圧倒され
ています。戸田建設のOB会には欠席しました。11月29
日は残念でした。長屋璃子さんから小沢昭一著「俳句で
綴る変哲半生記」頂きました。しつかりしなさいとのこ
とです。元気を出してガンバリます。我孫子日記、編集
後記を愛読しています。益々の御活躍を祈ります。

(12.1 小山陽也)

「倉院の戸籍かな」の精緻な解説評言誠に正当か大本道の慧眼に恐れ入るばかりです。こういう批評眼が正道でしょう。但し倉に古戸籍の存在を知らずして、御物（内部）を包含して「戸籍」とこの句に付いて視た評言もあり、これ又その詩眼にも頭がさがります。私も大宝二年の戸籍（戸籍の存在は察知しておるも）とは知らなんだ。ありがとうございました。（H. 25. 12. 15 青木啓泰）

先日の例会ではお世話になりました。楽しいひと時でした。又々、銀杏を頂戴しました。**ご夫妻の細やかなお心遣い有り難うござります。**

銃砲や素焼競焼セ翡翠の干

別所温泉の出会いもあり、今年は感慨深い一年でした。吟行も、恒例の蓮見舟の外、吉見百穴には都合つきませんでしたが、丸の内、千駄木界隈とたいへんお世話になりました。丸の内では、陽也さんにお世話になりました。いずれも、常連の方々のご参加で賑やかでした。誌面の充実では、昭七兄の寄稿が特筆されるでしょう。これから、皆さんに幅広く、句会参加、寄稿いただければと思います。啓泰さんには、お目にかかれませんでしたが、来年が楽しみです。『白金葭』がここまで来られたのは、偏に夫妻のご尽力によります。感謝するばかりです。何卒、来年もよろしく願いあげます。どうぞよいお年を。

受贈誌
(十二月号)

年を高志さま

幸一揮 (25)

鰐のぼり来る佃島渡し跡(飛行雲69号)

駿河岳水

銀座行く人名用を誰も見す(川)
良汗(珠)三田(落)の臺(形)

四

冬籠鉄瓶の冰煮ゆる音 (采14)

一
里
以
上

一株に生姜五つの力ご

小泉
博

石畳ちぐはぐ敷かる秋暑

尾かづひる

こだま（俳誌交換主宰選句）

飛行雲夏号（69号）駿河岳水主宰抽出
飛行船の影に入りたる花野中（30号）
鰯雲治らぬ人を見舞ひきて（31号）
彩十一月（113号）平野ひろし主宰抽出
先つぽに花を残して胡麻実る（31号）

飯田孝三
吉羽多美子

(平25.12.22 飯田孝三)

12.
22 飯田孝三

スペースが余りすぎそうとお困りの様子を伺い、義を

見てせざるは勇なきなりと妄文を呵しました。穴埋めの

お役に絶てば幸い（もし逆に今度はハミ出して、お困り

たつたまに・・・）それで今年ももう数日来年も又孝三先生

をパツと照らし出すことに致しましよう。どうぞは、お

年を。
高志さま
幸一拝
(25.12.22朝)

俳窓評論纂

*「あすか」11月号は創刊50周年通巻500号の記念号であり、名取思郷創刊主宰の百句が青山澄男氏の抄出で掲載され、大竹多可志氏の「夢と現実のはざまに」という題名で創刊主宰の小論が載っている。山尾かづひろさんがこの二代目の野木桃花主宰の元で活躍されている。この小論の中で、思郷さんの俳句論を紹介されている。中には、結局俳句は、物のあわれを詠むものという一文に注目した。芭蕉の「おもしろうてやがて悲しき鵜舟かな」の「やがて悲しき」の詩情こそが俳句である。思郷俳句は、物のあわれ、即物非情の詩、虚と実の中間を目指す、余情・余韻の句として左の句を挙げている。

手袋でいたはる運の向く手相

面影の母の細見の花擬宝珠

焚火に尻ならべて同期大差なし

ふるさとの顔皺ばかり山眠る

あたふたと電柱の蝉過密都市

著者は「かびれ」(大竹孤愁主宰)の重鎮であるが、「俳句は実感で詠むもの」と思っているとして、実感とは刹那に感覚的に発生する個々の思いであり、「自然の一部である人間とそれを取り巻く自然が融合する時に釀成され

る季感(情緒)そのものであり、それが詩的生命現象として誕生する季感詩俳句なのである」と書かれてある。いずれも私の考えと同じであるが、結果としての俳句は、もつと即物非情である。

手袋の十本の指を深く組めり

誓子 (S10)
高志 (H8)

燃え盛る焚火の臓腑真赤なり

蝉鳴かす電柱橋の際に立ち

誓子 (S19)

蝶のうた

長い人生にはさまざまな思い出がまつわりついている。楽しい思い出、つらい思い出、いまだに悔いの消えなぬ思い出……。ひとつひとつが懐かしく時にはせつない。それは故郷を遠く離れた旅人が故郷に寄せる思いに似ていよう。だからそれをいま「郷愁」と呼んでみる。

夕映えに

夕映えの雲が記憶の細道を
郷愁をつれてもどつてくる

けれどわたしの郷愁よ

おまえの住みかは

もうここには
ないのだから せめて

このきらびやかな夕映えの光りのなかを
鳥のように高くとぶがいい

武者昭七

蝶のように軽く舞うがいい

夕映えのひと時はこんなにも明るいのだから

不意に三次達治が「蝶のやうな私の郷愁！」（測量船）と詠つているのを思い出した。少年の頃あこがれた詩人であった。少年はあんなふうに詠いたいと不遜な思いを抱いたものだった。いまは遠い昔である。

鳥や蝶のよう虚空中をひらひらと舞う生き物を古代の人々は浮遊する人間の魂情念と見たてて畏れたという。和泉式部は群れ飛ぶ沢のほたるを男にむかつて我が身からあくがれ出る魂とみた。達治がみた郷愁の蝶とは海の広さにも似た舟のふところであつたらしい。

（2013・11・29）

貴船で歌つた和泉式部の歌（編集子補注）

物おもへば沢の螢も我が身よりあくがれいづる魂たまかとぞみる

我孫子日記

23 11 / 15 例会。 11 / 20 S O A。 11 / 21 * 久寺家中。 11 / 23 11 / 25 千駄木根津。 11 / 27 S O A。 11 / 29 ³* 同上吟行
句会。 12 / 2 青戸。 12 / 4 S O A。 12 / 8 ⁴* 真栄寺。
12 / 13 ⁵* 別所温泉。 12 / 20 例会。
農夫来て曲げて見てをり千大根
給食の一品切千煮られぬて
牡蠣殻を店の表に団子坂

高志

金柑生る三間離れ夏蜜柑

根津権現隨身門まで落葉搔き

S字坂そして丁字路冬黄葉

兜太

津波後老女生きてあり死なぬ

みち

長寿の母うんこのやうに吾を産み

みち

夏の山国母ゐて吾をよたと呼ぶ

十二月金子兜太と握手せり

みち

大槻の腹より炎珈琲店

みち

天長の太き桂の冬木なる

みち

悴みて唱ふ南無釈迦牟尼佛

みち

こつこつと杖引きのぼる冬の磴

みち

林檎貰ふ落葉も入れて貰ひけり

みち

編集後記

例会で言い足りなかつたことなどを帰途のコビアンで懇談している。恒例になつてゐる。先に鷗外吟行会では二次会の句会を行つた。ここではそこまではやらないが、古今の俳句俳人の名が出てくる。私は記憶力が鈍つてき

たので、気にかかるところはメモしている。

今回の話の中で、句集手賀沼（平8）の選者は金子兜太、飯島晴子と申しあげたが、後者は誤り、ここで訂正します。坂巻純子（沖同人）である。何故飯島晴子の名が出てきたのか分からぬ。飯島晴子は「藍布一反かな

うお祈り致しまして今年の締めとします。

かな山からとりに来る」のよう前衛句を作る孝三さん、幸一さん（？）お気に入りの女流俳人である。

燕村の辞世句「白梅に明あくる夜ばかりとなりにけり」についての飯田龍太の評言が良い。松村月溪の短冊が金福寺に懸っていた。「稻妻や浪もてゆへる秋津しま」は、鳥瞰か、どこかの山上からの囁目から想像力を働かせた句とか孝三さんの熱弁の途中でお開きになつた。

この途中只今孝三さんのFAXが届きました。大変ご丁寧な思いの一文を頂きました。毎月の言葉に毎回恐れ入つております。十三頁の孝三さんの思いは私の思いでもあります。句会、吟行句会を通して俳句文芸を愛し信じ楽しみたいと思っておりますので、どうか、投句、参加、寄稿、手紙などを頂けるようにお願い申しあげます。来年も大過なく元気に俳句生活が出来ますよう皆様のご健康共々お祈り致します。

ここまで後記を書いておりましたが、更に翌日、幸一さんから鑑賞文が届きました。お二人に編集のご心配をお掛けいたしましたが、いただいた原稿は全部載せ、旬にかかわらない文章を翌月以後に回しました。本誌は選句選評に力点を置いています。今月号が本来の白金葭であります。私のパソコン席が本誌の発行所でありますので、下にありのまま写真を掲載しました。Vサインは私の癖であります。どうか皆様によき年が巡つて来ますよ

白金葭 第34号 平成25年12月発行
編集・発行人 光成高志 (FAX 04-7187-1068)
発行所〒270-1119 我孫子市南新木2-14-17
表紙の題字: 加納綾女。写真は白金葭



発行所と発行人